

## 一五、この世を去って——気が付かぬ人々

( ページ『執着の果て』参照 )

人の揚げ足を取ったり、噂するのは面白いですよ。しかし、それをやっご覧なさい、他で自分が同じ事をやられていますよ。

自分がいて相手がいる。両方で出来ている訳ですから、自分だけじゃないですね。言われるから厭なのではなくて、そういう事をする、自分の心の中が曇ってくる。何にもならないですね。

曇りっぱなしで、そのままこの世を終わっご覧なさい、暗い処へ行っご覧なすよ。それこそ、暗いジメジメした岩の陰で一人にいるのもいる。

そんな事を言ったら、みんな「嘘だよ」と言うかもしれない。本当にそうしている人もいるんですよ。そういう処へ、たまに行く事があるんですが、

「あなた、そこで何をやってるの？」

「いやあ……分からないんです」

「ここに何年位いるの？」

「さあ……」

そういう人の心の中を観ていったら、もう何十年もいるんですね、何十年もですよ。

これは以前、高橋信次先生と初めて九州に来た時に、佐賀で講演をされたんですね。講演が終わり、質疑・応答の時間に、会場のご婦人が、

「亡くなった家の主人は、今何処にいるのか観て戴けないでしょうか」

と訊ねられたんですね。それで、壇上で高橋先生が私に仰った、

「朽木先生、あの方のご主人の意識を入れてください」

「先生、私は出来ませんよ、そんな事はやった事ありませんから——」

「出来ますよ、やっご覧なさいよ」

「先生、イヤですよ」

もう何百人といらっしやる前で、二人でやっごるんですよ。(笑)

「私がいるんだから、大丈夫ですよ。あのご婦人が、その事が分かったら、それでいいでしょう。やっごくださいよ」

そこまで言われたんでは、しょうがないですから、心の中を静かにしていったんですね。そして、そのご主人の意識を私に入れた訳です。

そうしたら、どうなったと思います？——十年前に交通事故で、バーン！とぶつかったまま……。自分の目の前が真っ赤になって、そのまま……。ただ呻き声を出しているだけ、ウーッ！……。……。

私はよく分かりますよね、私の体の中ですから——。

私の意識の方は、自分の体の横に出ている、それを観ている状態ですよ。

「あつ、これは交通事故だ！　こんなになるんだな。十年経ってもそのままなんだ」と分かったんですね。

よく大往生で、寝たまま亡くなられる方がおられますけど、周りは、「いやあ、大往生でしたね」と思いたいけれども、何時までも、同じ処に寝たままの人もいるかもしれないですね。この世から見たら分らないですからね。

まあ、私達は終わる時に、ウウ……と苦しんで死ぬよりかは、静かに死んだ方がいいですね。

それぐらい人間というものは執着というものがあるんですね。

ですから、亡くなる時まで人を恨んでご覧なさい。それこそ、何十年、何百年も人を恨み、帰れなくなってしまうですよ。

まあだ、偉い人達は、賄賂だなんかやっている訳ですよ。

「ちよっと監獄に行つて来ます」

なんてやっていますね。

当然、そういう人がこの世を終わつたら、地獄界ですね。自分の事を全然振り返らないんですから——。

そこから、何千年も出て来られない人もいる。

これは人の事を言つて申し訳ないですが、彼の有名な豊臣秀吉でさえ、まだいるんですよ、暗い処に——。アスラ界（阿修羅界・争いだけの世界）にいるんですよ。金の仮面を被つて、未だにやっていますよ。暗い処では、金も光らないんですね。もう大分長くおりますよね。そんな事を言つたら怒られますけれどもね。しかし、本当にそうなんですよ。

ヒトラーなんか当然そうですね。もう真まつ暗くらな処ところですよ。真まつ暗くらで分からないです

ね。人々の恨うらみの念ねんが消えるまで、そこにいなければならぬ。

それぐらい、人を迷まわせたなら、迷まわせただけの処ところに行かなくてはならない。

幾いくらこの世で、やりたい事をやっても、結局けつぎはそうなってしまう。

すると今度は、その人が明るい処ところに帰るまで、自分の魂たまのグループの人（残りの五人）が、この世に出て来られなくなってしまう。これじゃあ、駄目だめですね。

まあ、そういう処ところへ行きたくないから、（心の教しよえを）やるのではなくて、人間が、物の中に今いるということは、自分というものが、より人と共存きよぞん共栄きよえいの出来る自分になるといふことなんです。そして、調和に向かつて、今、ここにいます。

一九八六年九月